特別講座報告（1）

フレデリック・ビリエ先生「音と画像による中世の音楽——Web サイト Musiconis を使って」

七條めぐみ　愛知県立芸術大学音楽学部非常勤講師（音楽学）

1. 講座の概要

2019 年 10 月 23 日（水）18 時より、愛知県立芸術大学音楽棟大演奏室 A にて、フレデリック・ビリエ教授による特別講座を行った。ビリエ教授は愛知芸大と協定を結ぶパリ＝ソルボンヌ大学文学部の副学長であり、中世・ルネサンス音楽を専門としている。1981 年に『アミアンにおける 16 世紀の音楽生活』で博士号を取得し、ルーアン大学を経て現職に至る。

今回の特別講座では、ビリエ教授が作成した中世音楽のオンラインデータベース “Musiconis” を使って、グレゴリオ聖歌からノートル・ダム楽派、アルス・ノヴァを経て、ルネサンスに至るフランス音楽史の流れを、音や画像とともにお話いただいた。なお、講座は一般公開で行われた。

図 1. 講座の様子

2. 講座の内容

本講座は（1）Musiconis の仕組み、（2）Musiconis の素材でたどるフランス音楽史の二部で構成された。

（1）Musiconis の仕組み

Musiconis はビリエ教授が主導となり、ソルボンヌ大学を拠点とする音楽学研究所 IReMus（Institut de Recherche en Musicologie）のプロジェクトチームが作成したオンラインデータベースである。その中には、音や音楽を表すあらゆる図像（楽譜、絵画、彫刻、ステンドグラスなど）のデータが収められている。カバーしている年代は 8 世紀から 16 世紀まで、地域的には西ヨーロッ

パが中心となるが、一部ロシアや中東地域のものも含まれる。これらの図像データはもともと、大学固有のデータベースや、特定の分野に特化した既存のデータベースに属するもので、Musiconis はそれらと相互にネットワークを築くことで、複数のデータベース間の横断検索を可能にしている。ビリエ教授の話では、近い将来パリのルーヴル美術館、ニューヨークのメトロポリタン美術館との相互ネットワークが完成し、より多くのデータにアクセスすることができるとのことだ。

検索の実例を一つ示してみよう。楽器の「ハープ harp / harpe」という語を入力して検索すると、ハープのモチーフが使われた絵画、手稿譜、彫刻など 232 件が示される。そのうち 1 件を選択すると、図像のタイトル（英語／フランス語）、現在所蔵されている場所、本来あった場所、成立年代、製作方法、素材、図像が含まれる史料体、所属データベースとそのリンク、原語でのタイトル、図像学上の分類とキーワードが表示され、図書館でいうところの「書誌情報」を詳細に得ることができる。検索は英語またはフランス語で行うことができ、成立年代や所蔵地域、楽器の種類などの観点から絞り込み検索をすることも可能である。

（2）Musiconis の素材でたどるフランス音楽史

講座の後半は、Musiconis で検索可能な図像資料と、それに合致する音素材を用いながら中世・ルネサンス音楽史の流れをたどった。大まかな時代区分は以下の通りである。

1．中世初期（5 ～ 10 世紀）
2．ノートル・ダム楽派（1150 年～ 1250 年）
3．アルス・アンティクア（1250 年～ 1320 年）
4．アルス・ノヴァとフィリップ・ド・ヴィトリ（1320 年代）
5．フランス＝フランドル楽派（15 世紀）
6．ルネサンス（16 世紀）

ビリエ教授はこれらの区分に沿って、時代を象徴する音楽のジャンルや作品を引き合いに出しつつ、独自の観点で音楽史を語った。それが最もよく表れていたのが、カスティーリャの国王アルフォンソ 10 世（1221-1284、「賢王」とも）

の統治下で完成した『聖母マリアのカンティーガ集 Cantigas de Santa María』についてである。

この曲集には 400 を超えるカンティーガ（中世イベリア半島で歌われた叙情的な歌謡）が収められるほか、当時の楽器を描いた挿絵も多数含まれ、音楽図像学的に貴重な史料となっている。ビリエ教授によると、このカンティーガ集はいかなるデータベースにおいても公開されていないため、残念ながら Musiconis で閲覧することはできないという。それでも、ビリエ教授が個人的に収集した図像の数々を通じて、中世ヨーロッパで使われていた楽器の種類とその多様性に触れることができた。中でも興味深かったのは、撥弦楽器の違いが詳細に描かれていることである。例えば、リラの一種であるロート Rote、ツィターの一種であるカーヌーン Quanun は共鳴版の上に弦が張ってあるのに対し、ゴシック・ハープ（ケルティック・ハープのような小型のハープ）は楽器の外枠が共鳴箱となり、その内側に弦が張られている。そのため、両手を使って弦を操作することができ、一つの弦で半音上げたり下げたりすることが可能となるのだが、その演奏スタイルの違いがはっきりと描き分けられている。

私たちは、音楽の視覚史料というと、作曲家の手稿譜や出版譜など、楽譜をまっさきに思い浮かべがちである。しかし、今回の講座を通じて、教会の内装やステンドグラス、あるいは宗教的・文学的史料の中にもさまざまな音楽のモチーフが用いられていることが分かった。これらの史料に触れることは、印刷技術はおろか、音楽を「書き残す」こと自体が稀であった中世の音楽生活を知るために極めて重要と言えるだろう。筆者は大学生に音楽史を教える立場として、Musiconis で得られるような図像史料を教材として活用し、中世・ルネサンスの時代にいかにして音楽が存在していたのか、生き生きと伝えられるような授業を心掛けたい。

図 2.（右から）ビリエ先生、筆者、音楽学コース院生 2 名、美術学部の高梨先生

参考資料：Musiconis http://musiconis.huma-num.fr/fr/ （2020 年 1 月 18 日最終アクセス）